

樺太での終戦から引き揚げまで

横沢 菊枝

私は、昭和2（1927）年、樺太（現：ロシア連邦サハリン州）の南西にある、小能登呂村で生まれました。小能登呂は、南に真岡、北に野田という大きな町があり、その中間くらいの位置にありました。家族は、桶屋を営んでいた父と、母、私の3人でした。戦時中にも、父の仕事は途切れることなく、私は、家の手伝いをしていました。小能登呂の食糧事情は、食べることに不自由することはなく、海に近いこともあり、海産物にも恵まれていました。

昭和20年、私は18歳になっていました。8月15日に、消防署に集まるように言われ、近所の人たちと一緒にラジオ放送を聞きましたが、何を言っているのか分からず、後で、みんなが「敗けた」と言っていたので、終戦を知りました。

3日後に、ソ連兵が村に入ってきました。我が家にも、銃を持った2人の兵隊が入ってきましたが、ニコニコと笑いながらでしたので、怖いという感じは受けませんでした。それから2年間、日本に帰る機会はありませんでした。

父は、その後も仕事を続け、ソ連兵から桶の注文を受けたこともありました。ビーツを漬けるのに使ったようです。私は、その集金に行き、ソ連のお金を受け取ってきました。

終戦から1年後くらいに、我が家の前の通りで、ソ連兵同士が撃ち合いをしていたのを目撃し、驚きました。どんな事情やトラブルがあったのか分かりませんが、数人の死者が出ました。

ビーツ

アカザ科のサトウダイコンの仲間。ロシア料理のボルシチには欠かせない野菜。酢漬けにしてピクルスとしても食される。日本では根や葉が赤いので「火焰菜（カエンサイ）」とも呼ばれる。

私は、ソ連軍の将校の家の子守などを手伝うこともありました。また、映画館でソビエト映画「石の花」を観る機会がありました。ロシア人向けの上映だったと思いますが、知り合いのソ連兵のマダムが、特別に連れて行ってくれました。カラー映画を初めて観て、本当に驚きました。ピカピカと光っていたという印象でした。

日本へ引き揚げてきたのは、昭和 22（1947）年で、私は 20 歳になっていました。^{まおか}真岡から出港しましたが、日本海には機雷が残っていたので、オホーツク海、太平洋を回り、2 日後に、函館に着きました。父の商売道具である桶づくり用の大工道具は、何とか持ってくることができました。刃物などは、樺太からの持ち出しを禁止されていたようですので、函館の税関では、かなりうるさかったです。

函館から、親戚を頼って美唄に来ました。農家だったので、ここでも食べるものに困ったことはありませんでした。終戦から引き揚げまで、家族とともに無事に過ごすことができ、本当に幸運だったと思います。戦後は、故郷の人たちと「^こ能^の登^と呂^ろ会」をつくり、旧交を温めることもできました。

（よこざわ きくえ 昭和 2（1927）年 旧樺太・真岡郡小能登呂村生まれ）

石の花（いしのはな）

1947 年、ソビエト連邦製作の映画。日本においての戦後最初の色彩映画でもある。